広報
ふじかわ

9月号 昭和58年9月20日発行 No.266

町のメモ

昭和58年9月1日現在

人口	17,008人
増減	＋19人
男	8,383人
女	8,625人
世帯数	4,356世帯
面積	31.09㎢

富士川町　総務課

町の今年の目標
「笑顔であいさつ明るい町に」

お母さんと真剣な豆博士

「親子くらしの一日教室」

今年はじめてのこころみとして、「親子くらしの一日教室」が、8月18日㈭、第一中学校特別教室でおこなわれました。

この教室は、夏休みを利用して親子で一日楽しく、普段子どもたちが好む清涼飲料水や食料品について、着色料、ビタミンC、糖度、デンプン等の知識をともに学び、親子のふれあいを深めることを目的におこなわれ、当日参加した小学5～6年生の親子20組は、真剣なまなざしで各実験に取り組み、大変たのしそうでした。

がんばった防災訓練

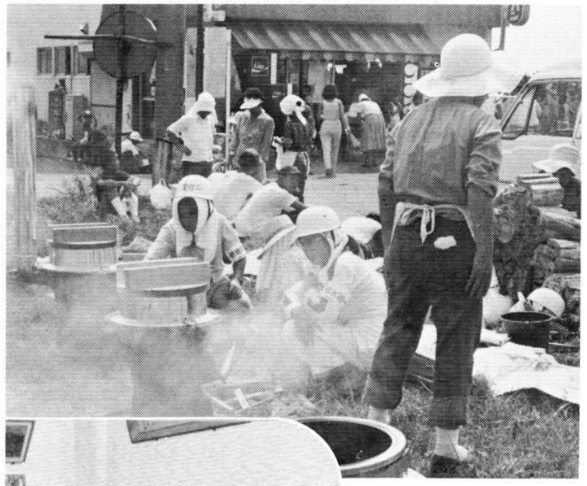
9月4日「地域防災訓練」

いつ起こるかわからない「東海大地震」にそなえ、9月1日(木)、国・県・町や民間事業所等が参加し、広域防災訓練が、また、9月4日(日)、地域のみなさんが参加して、地域防災訓練がおこなわれました。

広域防災訓練では、町内21事業所九四七人が、実情にそくした防護、出火防止、消火、救急救護、情報伝達等の訓練を手際よくおこない、また、地域防災訓練では、各地区の自主防災組織ごと、可搬式ポンプ操法、消火、炊き出し、情報伝達等の訓練を区民一体となり、真剣におこなわれました。

今年の地域防災訓練では、地震災害の認識が高まってきたことと、日曜日に実施されたこともあり、町民の関心は強く、六、八一六人のみなさんが参加しました。また、当日の訓練には、町内の中学生の7割にあたる約五九〇人が参加し、各訓練ごとおおいに活躍しました。

9月1・4日両日におこなわれた防災訓練は、混乱もなく無事終了しましたが、各地区の自主防災組織や事業所等では、地震発生時における心構えをおこたることなく、これからも、いざという時にそなえておくことが大切です。



〝今日のごはんはまかせてね〟(東町一・二区，日の出町区)

これで一安心〝手際よく応急処置〟(侭下町)

上 訓練会議中(9/1)

地震心得10カ条

◎まずわが身の安全をはかれ
◎すばやく火の始末
◎火が出たらまず消火
◎あわてて戸外に飛び出すな
◎狭い路地やへいぎわ、がけ川べりに近寄らない
◎山崩れ、がけ崩れ、浸水に注意
◎避難は徒歩で、持ち物は最少限に
◎協力し合って応急救護
◎正しい情報をつかみ、余震を恐れるな
◎秩序を守り、衛生に注意

子どもたちも

9月1日「広域防災訓練」

町地震災害対策本部編成図

- 本部長(町長)
  - 副本部長(助役・収入役・教育長)
    - 総務班
    - 企画調整班
    - 救助班(第1)(中之郷・岩渕)
    - 救助班(第2)(木島・松野)
    - 衛生班
    - 調査施設班(第1)
    - 調査施設班(第2)
    - 経理班
    - 給与班
    - 給水班
    - 教育班
    - 避難誘導班
    - 連絡班

自衛隊ヘリコプターで焼津市立病院にかけつける深谷蒲原総合病院長(%)

町災害想定図

「さあ早く　早く」子どもたちによるバケツリレー(宮町)

地域防災訓練の反省・意見は

◎火災が発生しないよう、避難前の点検を。
◎婦人や自営している人を中心に組織の見直しを。
◎自主防災組織の治安部門と警察との連絡体制は。
◎避難後、ガスボンベを点検したが、60～70%の人はしめてなかった。
◎今回は参加者が多かったが、多くの人は義理でつとめているような気がした。
◎避難するときは、少人数で行動した方がよい。
◎山間部落での避難のあり方については、各戸の周辺には畑等安全地帯が多くあるので、そのようなところに避難した方がよい。
◎訓練のマンネリ化。
◎多数の区民が参加して、有意義であったので、今後も日曜日に訓練したら。
◎中学生の参加は非常に好評であった。
◎今後、毎月少なくとも月一回は、各ブロックごとに、可搬式ポンプ操法等をおこなうことを誓った。

「秋の交通安全運動」が9月21日(木)から30日(金)までの10日間全国一斉におこなわれています。

この運動は、広くみなさんの交通安全意識を高揚し、正しい交通ルールの実践を習慣づけることにより、交通事故防止の徹底を図ることを目的として、歩行者や特に老人の交通事故防止、二輪車の交通事故防止、シートベルト・ヘルメット着用の推進を重点におこなわれ、町では、交通安全対策委員会、交通安全協会、交通安全母の会等の推進機関や団体が、緊密な連絡をとりあい、街頭指導、シートベルト・ヘルメット着用指導、道路交通安全施設等の点検を積極的に進め、運動を展開しています。

また、この運動では、一人ひとりが事故を起こしたり、被害にかからないよう安全な交通行動の実践を図ることを目的として、9月30日(金)が〝交通事故0(ゼロ)を目ざす日〟として設定されました。

みなさんも、歩行者や老人保護に関する交通安全ルールを再認識し、「思いやり」のある運転の励行に努め、町から交通事故をなくしましょう。

8月の交通事故
〝15日(月)は雨で3件も〟

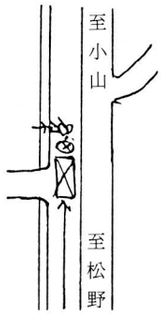
8月中、町内では、人身事故6件(11)、物損事故1件(3)発生し、7人が1週間から3カ月の怪我をしています。同事故により、町内の人も、3人が加害者に、3人が被害者になりました。

人身事故の発生状況をみると、運転者は、子どもの「とび出し」にも応じられるよう、安全速度を守り、前方を良く見て運転することが大切です。

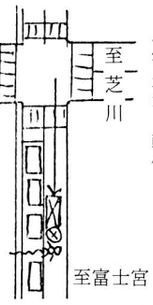
9月号では、8月中に発生した事故のうち2件の事故発生状況について、みなさんにお知らせします。(()内は、前年同月期交通事故発生数)

※8月号から「広報ふじかわ」では、町内からの交通事故発生〝0(ゼロ)〟を目ざし、事故発生状況をみなさんにお知らせしていきます。

◎8月15日　午後4時20分発生
県道富士川身延線(木島)
普通乗用車⇔幼児(5歳)
幼児が、骨折で重傷



◎8月20日　午後3時35分発生
県道富士宮由比線(侭下町)
普通乗用車⇔小学生(4年)
小学生が、軽傷



〝思いやり　ゆずる心で　防ぐ事故〟

おじいちゃん　おばあちゃん　いつまでも元気でね

100人のうち6.6人――これは、町の人口に占める70歳以上のお年寄りの割合です。町では、明治、大正、昭和と三代にわたって町の発展におおいにつくされてきた、これらのお年寄りの長寿と健康をお祝いするとともに、今後も今日までつちかってきた知識と経験を社会に役立てていただこうと、9月7日(水)、第一小学校・第二中学校両体育館で敬老会を開きました。

また、9月5日(月)には、今年で3回目のこころみとして、90歳以上のお年寄り23人のお宅を常葉町長が訪問し、長寿をお祝いし記念品をおくりました。

ちなみに、町の70歳以上のお年寄りの人口は――

富士川地区が763人、松野地区が364人の合計1127人で、前年より83人増加しました。

◎90歳以上の高齢者(敬称略)
S58・9・1現在

○女　性

小林たみ	96	小山	
望月こう	94	相生町	
小林きう	94	相生町	
斉藤もと	93	上町	
滝しげ	93	坂下	
高坂せき	93	坂下	
田村なか	93	本通一	
斉藤志ん	93	富士見町	
望月よし	93	東町一	
塩坂しん	91	本通三	
土橋たね	91	小池	
天野きみ	90	上町	
宮田ナオ	90	坂下	
斉藤りん	90	本通一	
清水その	90	富士見町	
白井たい	90	清水町	

○男　性

清兼次郎	94	清水町	
深沢百蔵	91	清水町	
望月春吉	91	上町	
佐藤宗男	90	木島	
津田秀治	90	新町本町	
石川清太郎	90	四十九町	
清水周作	90	八幡町	

式典であいさつする町長(富士川会場)

常葉町長から
最高齢者小林たみさん
へ記念品がおくられる

町商工会から富士川地区子ども会へ〝優勝旗〟贈られる

富士川地区子ども会球技大会優勝旗(商工会長旗)及び準優勝杯(社会福祉協議会長杯)の贈呈式が9月3日(土)、午前9時から斉藤久男商工会長、小永井一雄・滝利雄社会福祉協議会両副会長・望月計夫同事務局長、若林茂信子ども会世話人会会長、望月友次指導者連絡協議会顧問が出席し、商工会館でおこなわれました。

富士川地区の子ども会球技大会は、昭和20年代後半から男子はソフトボール、女子はドッチボールの種目でおこなわれ、今年で30回を迎えました。各優勝チームには、商工会及び商店連盟から寄贈された優勝旗が贈られてきましたが、当時の優勝旗が古くなり、使用に耐えられなくなったため、富士川地区子ども会世話人会から社会福祉協議会に優勝旗新調の要望が出され、商工会の好意により今回の新調贈呈となりました。

贈呈式後、世話人会及び指導者連絡協議会から商工会と社会福祉協議会に感謝状が贈られました。

この優勝旗及び準優勝杯は、来年の5月に予定されている球技大会から使用されます。

今回の贈呈にあたり、斉藤久男商工会長さんは「町の将来を担う子どもたちの健康増進と成長を願って少しでも貢献できればと思い、ささやかな優勝旗を届けました。子どもたちにかける期待はたいへん大きなものがありますので、この新調された優勝旗がもとになって、なお一層の努力を期待します。私も今年県の連合会長に就任しましたので〝われについてこい〟という気持です」と話していました。

また、若林世話人会長さんは、「商工会長さんをはじめとして、みなさんの好意により、優勝旗がりっぱなものになりました。このみなさんの気持にこたえるためにも、子どもたちが、スポーツを通して、明日の町づくりのためにがんばらなくては……。炎天下で猛練習をしてきた子どもたちはおおいにはげみとなると思います。よりよい子ども会活動を進めるためにもがんばっていきたい」と話していました。

郡身障福祉会から表彰される宇佐美多一さん

宇佐美多一さん(46)
(清水町)

昭和58年8月21日(日)、由比町民体育館でおこなわれた庵原郡身体障害者福祉会総会において、当町の宇佐美多一さんが、永年に亘る社会福祉事業の向上や発展に積極的に寄与した功績により表彰されました。

今回の受賞にあたり宇佐美さんは、「昭和51年4月、仕事で怪我をしてしまい、それ以後下半身不髄で車イスの生活となってしまいました。家族の協力でどうにかいろいろできるようになりましたが、自立更生に向けて更に努力をしていかなければ……。最近、障害者について、みなさんの認識や協力が強まってきました。本当にありがたいことです」と話していました。

楽しい催しものでなごやかなひと時
(松野会場)

今月のテーマ

広報ディスカッション

わたしの災害体験

地震・かみなり・火事…

提言者　芦川由希子さん（木島）（33）

戦災を体験
心から平和を願う

相生町　幸塚とし子さん(66)

昭和20年、静岡市も何度か空襲を受けました。6月20日、わたしたちの住んでいた鷹匠町も一夜にして焼野原となりました。そして、8月15日は終戦。今から30数年も前のことですが、私には、ついこの間のことのようにはっきり覚えております。当時、夫を海軍に送り出し、妹の夫は陸軍軍人として出征しておりました。日本中戦争です。毎日のように、B29は頭の上をブウーンブウーン。空襲警報。何度か防空壕へ逃げ込み、敵機の去るのを息をひそめていたものです。6月20日の空襲の日、隣組の人たちと早目に避難して、命だけは助かったのです。

一夜明けて焼野原となった元の家の前に立ち、一つでも役に立つものでもあればと願いつつ、焼跡を探してみました。必死のおもいでした。三日後、夫が戻って来ました。それからが、又、わたしたちの戦争でした。夫の故郷の富山へ行くことになりました。汽車の中は、復員の兵隊で一杯で、「女と子どもだけ乗せるな」と言って、本当に死にものの狂いでした。二年程金沢で暮らしました。物はすべてヤミ市です。やっと求めた子どもの靴を片方電車の中で落して来たり、悲しい思い出ばかりです。今こうして3人の子ども7人の孫に囲まれた幸せが、永久の幸せでしょうか。

大韓航空機が撃墜され、日本の人たちも亡くなっております。不吉な予感がいたします。日本は、永久に平和であってほしいと願わずにはおられません。

災害に対しての感想は

本通り四　桐谷定雄さん(75)

私が15歳の大正12年9月1日の関東大震災は、今から60年前初めて遭遇した恐ろしい天災でした。が、幸い当町にては一部の蜜柑山が崩れたり、道路に亀裂が入った程度で、さしたる被害もなかったものの、東京は全くの焼土と化し、幾10万人の貴い生命、財産が無残にも失われたことは、当時の我々にとって現実の悲劇であり、後世の人々は記述、記録等によって思い起こせるものと思います。

災害には、天災と人災がありますが、天災の場合、現在は気象科学の発達、気象衛星又は地震予知等によって予報が進歩したものの、あくまで予報で、去る8月17日の5号台風は、本土上陸後、進路は予報とはたいへん異なったことを思うと、予報はあくまで予報だなと、つくづく思わざるを得ません。

天災は、人為でどうすることも出来ないのが現状で、災害が起きてからの後始末「ころんでからのハシオリ」で誠に残念です。

人災はある程度は防止出来るはずですが、これも出来ないのが現状で、これではならないと常に感じています。例えば、危険な橋梁交通関係の道路、殊に街角等の関係。一考を要することが多々あります。為政者の一段の奮起を期待したいと思います。

「関東大震災を想起して」

南町一　鈴木富治さん(82)

大正12年9月1日、今はだいぶ忘れ去られておりますが、その日こそあの関東大震災の日です。

当時、私は、豊橋の輜重隊に入隊中で、数日後救援物資の輸送と警備で元箱根町へ出動いたしました。露営生活20日間、当時は現在のような国道はなく、所謂箱根八里を、今日は三島、明日は小田原と不眠不休の活動をしました。

偶々流言飛語が相いついで流布され、不逞の徒が暴動を起こすとか、某国が進撃するとか、人心が動揺し不安の日がありました。

鉄道は不通で、箱根越しの被災者で不審の服装をした人は「君が代」を歌わして通したり、まったく今考えれば馬鹿げたようなものですが、何か大事件が突発すると流言はつきものでは……。

今後予測される東海大地震が万一発生した場合、飛語が流れても60年前と今日では情報関係も整備しておりますから、惑う人はないと思いますが、平素とは心理状態が異りますので、災害に対処する行動は勿論ですが、精神面の訓練もまた必要かと思いまして筆をとりました。

おそろしかった〝火災〟

富士見町　佐野謹子さん(58)

災害と言えば、すぐ地震、雷、火事、親爺という諺を思い出し、幼かりし日の近所の火災が走馬燈のように浮かんでまいります。

たしか宵の11時頃、屋外のけたたましい叫び声と母の声で飛び起きた時の恐ろしさ、紙の固まりの火の粉と真っ赤に天をこがし燃え上る炎のすごさに呆然と立ちすくんでしまいました。

どこかのおじさんが、「風向きを変えないと、部落中が火の海になっちゃうぞ」と真っ赤な腰巻きをかざしておまじないをしたり、重労役の牛馬に目隠しをして避難させたり、消火活動と共に大人の必死の姿。いざという時には、学用品を持って逃げるように言われていた私は、大きな鉄釜をどう運んだのか、畑の真中で抱えている始末。焼け跡に無一物となって立つ人の姿と、背筋が寒くなる思い等……。

天災であれ、人災であれ、「備えあれば憂いなし」のごとく、日頃の心構え。避難訓練の実施と積極的な参加、消防団と周囲の人たちとの協力と団結等が、いざという時、何等かの形で生かされることになるでしょう。

市場前の国道が川になったこともありました

日の出町　若月さくさん(65)

災害といえばまず最初に思い出すのが関東大地震です。

私は、6歳になる少し前でした。地震と同時にみんな外に飛び出たら5歳下の妹が一人で泣きじゃくっていたこと。しちりんやおひつがコロコロと転がり棚のものはみんな落ちていたこと。また普段澄み返り子ども達の水遊びにはもってこいだった家の前の大きな川も一瞬のうちに泥水に変ったこと。夜になると雨戸を外して竹薮の中に二晩位寝たこと。夜が明けると両親が何処で作ってくれたのかまん丸い大きなおむすびを食べた事などを覚えています。それから、狩野川台風の時です。もう30年近く前でしょうか。当時、本通り四に住んでいました。幸町地区で土砂崩れがあり、市場の前にあった川がせき止められ、水が逆流し国道が川になってしまい家の中にも階段二段位まで水が上がりました。国道をはさんだおむかいは天井50cm位の所まで浸水し、本州製紙岩渕工場に勤めていた主人は、胸まで濁流につかり泳ぐようにして帰って来ました。ボートや大人の肩車で上通りに避難した人も大勢いました。風呂桶や畳はプカプカと浮くし、トイレの汚物があふれ出てしまったのは一番困りました。あの年、子どもたちのおひな様も一階の押入れにしまったばっかりにみんな水びたしにしてしまいました。

いくつかの災害を体験しましたが、いつも主人は勤めに出ていて留守の時でした。

三軒も土砂でうまったことがあったよ

木　島　佐藤宗男さん(90)

わしらん覚えている限り、木島で一番ひどかった災害というと、ヤブンナカ、アシカワノウチ、ミセノウチの三軒が床上まで流れこんだ土砂でうまってしまい、共同の水車小屋もつぶれてしまったことで、もう70年位前のことかなあ。その時は、ものすごく雨が降って、池の鯉が逃げた家もあったくらいだよ。

普段は、川巾6尺位の小さな川だが、山からの湧き水だったんで飲み水に使ってたんだが、しけが続き山が何ヵ所か崩れて川をふさいでしまったもんで、川が小さいから山津波がそのままきて、木の根っ子などが土砂といっしょに川下の三軒に入ってしまった。その家の人たちがオイオイと助けを求めて逃げてたが、幸いにも人には害はなかったよ。村中の人たちがみんな出て徹夜で片付けをした。今のように機械なんかなかったから、ワラのモッコを作って、人の力で片付けした。ちょうど夏の終り頃で、今じぶんかなあ。山あり、川ありの自然環境にも恵まれ、水遊び、はや釣り、沢ガニとり……等、とっても住み良い所です。でも、普段は遊び場がありません。みんなに親しまれた〝つくろい場〟もなくなり、のびのびと自由に遊べる広場が、あったら良いのにと思うこの頃です。

生まれ育った人、他町から来た人、あなたの思い出や感想等、感ずるままに投稿してみては……。

◎10月のテーマ
わたしの故郷（ふるさと）〝ふじかわ〟
◎字数
400字づめ原稿用紙一枚以内
◎締切り日
10月7日(金)まで
◎投稿先・問合せ先
富士川町役場・総務課
岩渕121番地
◎注意事項
匿名者の原稿は掲載しませんから、必ず住所・氏名・年齢を記して、締切り日までに投稿してください。

10月のテーマ

わたしの故郷（ふるさと）〝ふじかわ〟

提言者
久保田敬子さん(39)
（伝下町）

松野村と富士川町。昭和32年4月旧富士川町と合併し、私たちが松野村立小学校の最後の卒業生となりました。

中学の入学式は、富士川町立第二中学校と、名称も新らたになりました。合併当初は、住所を書く時等、意識して富士川町と書いたりしたものです。町民体育大会や文化祭、各種団体との交流等、本町との接触も多くなり、私も何回か町の行事に参加させていただきました。

町もだんだん変化し、住宅、工場は増加し、教育、社会福祉施設も充実してすばらしい町となってきました。

また、私たちの地域では、

ママさん記者が取材中

"オケラ会"

秋の夜、涼しい声で鳴く虫、螻蛄（けら）、俗に〝おけら〟外見に似合わず、強く、空を飛び、地にも潜るあのオケラ。今月は、その名も「オケラ会」とユニークな名を持つグループを紹介いたします。

9月5日(月)、秋とは名ばかりの猛暑の中、会長の清水晃さんと会員の常盤博昭さんに、役場会議室でお話しをうかがいました。

「オケラ会」は、昭和37年12月、農業を営む若者11人が集まり結成され、現在は、会員18人で活躍しています。

「オケラ」のもう一つの意味は「無」孤独になりがちな農業青年が、仲間を作り、何も無いところから、何かを生み出そうという意味も込められています

神社の一角に育苗園を作り新品種の苗木を育成したり、町内外へ剪定、接木等の技術提供をして、農業振興に努めました。また、会員の自由な意見発表の場として、わら半紙、ガリ版刷りの会誌「シトラス（みかん）」を年2～3回発行しました。

昭和41年には、町教育委員会に働きかけ、「柑橘青年学級」を結成し、これらの活動を県の研究発表大会で発表して、県教育長より表彰されました。

昭和42年、町文化祭では、自作自演の「若いやつ」を上演、町長賞に輝きました。

毎月一回の定例会は、会員宅を巡回し、現在まで、一度も欠かしたことはないとのこと。この他、年一度の研修会があります。若い頃は、西湖等へ、キャンプに出掛け、他のグループとの交流を計り、食事のことでもめないようにと、若い女性の参加をお願いし、このキャンプが縁で、何組かのカップルが誕生しました。妻帯者が増え、行先も伊豆や御前崎などの民宿に変わり、現在は、会員だけで一泊二日の研修旅行になりました。

若木も、大地にガッチリ根をおろし、大きな木となり、地域のいろいろの分野で活躍しております。

私たちが、生きるために大切な「食」の部分を、次の世代へ自信を持ってゆずれるような、世の中になってほしいと願わずにはいられませんでした。

（広報モニター　天野恵美子）

「オケラ会」20周年記念での会員のみなさん
（S.57.8.29）

社会教育の自立

甲斐性ある証

とかく、人は一定の年齢を過ぎると人生の上で果たすべき自分の使命は終ったと判断し、社会の為に積極的に貢献し続けようとする姿勢を放棄しがちである。そして、自分だけの小さな範囲を限定して、その中で小じんまりとして暮らすことが最良であり、幸せな人生であると思い込むものらしい。一般にいう隠居という現象である。不思議なものでそうした環境に浸った途端に気力も体力もぐっとふけこむのが通例のようだ。

仕事を持ち、子どもを一人前に養育しなければならない使命を持つ若い時ならいざ知らず、年齢を経るほどに通例の経路をたどることには、避けることができない必然性があるのかもしれないが、私はその事がたとえ一般的な傾向であるにせよ、そうはなりたいと思わないのである。なぜならば、老いても体力気力ともに旺盛でありたいという願望と、実社会の一端と何がしかのかかわりを持ち続けながら人生を謳歌したいという期待を持つからである。

人間の社会もジャングルに住む動物の世界と同様に、生きて生活している以上、いつかは老いぼれ、その一方では若い力の台頭があることは世の常である。しかし、私たちは本能的にのみ生きる動物とは大きく異なり、それぞれにすぐれた知恵を持つ人間であることを片時も忘れてはならない。

従って、たとえ年を老いたとしても、その年齢に適した生きがいを見出し、自らを再発見すると同時に、長い年月を費して会得した尊い知識、とりわけ、時代から時代へ伝承するべき文化遺産の継承については、人間社会を構成する一員として考えの中心へ位置づけておく必要があると思うのである。

時は人の意志を無視するかの様に流れ、いつしか今年も秋口を迎えた。

目の前をかがみ腰の老婆が、軽く会釈して通り過ぎた。

ふるさと探訪

石仏巡礼(一)

清源院の六地蔵

国道富士川橋西端から旧東海道を登りつめると間もなく、曹溪山清源院がある。高い石段の中段に、結界石、庚申塔、名号塔等と共に六地蔵が祀られている。六地蔵が成立したのは平安時代である、一般衆生は常に悪業を犯し、六道に輪廻転生する生活をくり返し生きている。これを救おうとする地蔵の本願から分身として六地蔵が成立したといわれている。六道とは、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間、天上をいい、人間死ぬとこの六道のいずれかを通らねばならない、その六道のそれぞれにあって導いてくれるのが六地蔵であると言われ、宗派を越えて信仰された。

文政十三庚寅年六月（一八三〇）清源院九世、龍門徒、発願人泰龍、心龍によって造立されたものであり、蓮華の台座の上に立つ平均像高七五cmの丸彫立像である。向って左から、法性地蔵、宝性地蔵、延命地蔵、陀羅尼地蔵、法印地蔵、地持地蔵であり、温和な地蔵の観念とは変った庶民的な顔だちは一層信者に親しみを与えたことと思われる。この六地蔵は日本石仏事典にも掲載され紹介されている。なお、本堂は江戸末期の建築であるが、よく整った寺院の形を残している。

住職に乞えば地蔵和讃の一節など唱えていただけるかも知れない。本堂裏の墓地には信州石工の作品と思われる石仏も数多く見ることが出来る。

（芦川守正）

資料・東海地震⑭

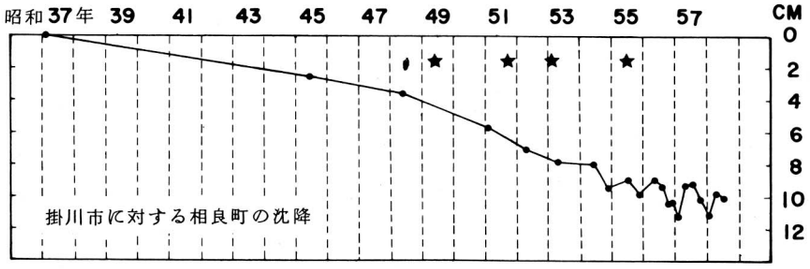
御前崎の沈降

東大地震研　恒石幸正

東海地震を予知するために建設省国土地理院は、掛川市から相良町まで、約25kmの区間の測量をくりかえしています。これは水準測量とよばれる方法で、三脚にのせたレベルという器械から2本の標尺をのぞきながら、土地の高さを精密にはかっていくものです。

測量をくりかえした結果、上図にみられるように掛川に対して南東方の御前崎が沈降している様子がわかりました。初期には測量の間隔が長かったのですが、最近では一年に四回測量されています。それにつれ、夏と冬との季節的な変化も認められるようになりました。

今から一二九年前の安政東海地震の時には御前崎が降越しました。ですから、現在進行中の御前崎の沈降は、次の東海地震へ向けた地殻変動であると考えられています。図中の星印は順に伊豆半島沖地震・河津地震・伊豆大島近海地震・伊豆半島東方沖地震を表わしています。図にものさしを当ててみると、地震活動と共に沈降の速度もはやまっていることがわかります。



戸籍の窓

S58・8・1～8・31現在
（敬称略）

おめでた

区名	氏名	保護者続柄	
小山	植松 亮	博文 長男	新町本町
坂下	岩下恭朗	登喜雄 長男	四十九町
旭町	太田好美	幸男 長女	宮町
〃	夏目靖子	博好 長女	小池
堺町	鈴木俊介	正巳 長男	大楽窪
川坂	高木綾子	厚 長女	〃
南町二	小林裕美	幹雄 長女	〃
八幡町	塩川広樹	正明 三男	本通四
〃	天野寿規	厚己 長男	幸町
富士松野	八木心一朗	高次 長男	東町二
大北町	石橋 螢	彰 長女	南町一
〃	宇佐美勝広	英勝 長男	若月龍弥
伊下町	小川喜子	裕司 二女	清水裕子
			在原彩葵
			越高大輔
			三浦勇太
			福田健太
			樋口 慧
			森山響子
			藏地久美
			北川慶一
			宇佐美渚
			正隆 二女
			三男 長女
			晴夫 二男
			忠則 三男
			正美 長男
			和美 長男
			政美 長女
			彦八 二女
			次男 長男
			勝敏 長女

敏昭 二男

かなしみ

区名	氏名	年齢
舟山町	佐藤きよ	七三
宮町	齋藤辰二	七九
東町二	芦澤潤治	九一
南町二	松山まつ	七三

一里塚

NHK朝のテレビ小説「おしん」は、いま爆発的な人気を呼んでいる。私も毎日昼の再放送を楽しみにしている一人である。老若男女を問わず全国津々浦々「おしん」の番組を知らない人はいない。小林綾子ちゃん扮するおしんの少女時代の再放送があった夏休みは、今までかつてない視聴率であったという。ドラマは進行し、関東大震災ですべてを失ったおしん親子は、やむなく夫竜三の故郷佐賀に移ったが、姑の冷たい仕打ちに辛い毎日を過している場面が現在放映されている。最近の新聞によると、佐賀県では、嫁イビリが佐賀のイメージダウンになるとして内容変更をNHKに申し入れたとか。まさに日本中がおしん大フィーバーである。どうしてこんなに人気があるのか、私なりの見方であるが、人一倍の努力と忍耐を重ね毎日を精いっぱい生きるおしんに人気が集ったのでは――それにしても、現代の満ち足りた社会の中で、今の若者達はおしんのような人間像を一体どのように理解するであろうか。青少年非行問題とあわせ考えさせられるこの頃である。

大久保

善意銀行へ寄託（敬称略）

S58・8・8～9・7

四千五十円
静岡銀行富士川支店
一万三千六百三十円　清水銀行
三千円　伊下町子ども会
四百九十五円
望月　よし（東町一）
二万円　清水　寿枝（富士見町）

お母さんの〝知恵袋〟

一、上手な天ぷら油の使い方

揚げ物用油は淡色で、こしが強いもの、加熱によって変質しにくいほうがよい。サラダ油は生食用で天ぷらに使うのもよいがサラダ油より安価な天ぷら油で上等です。上手な使用方法ですと九回位までは使用できます。

二、油のいたみは使い方しだい

○揚げ物の種類で油のいたみ方が違います。精進揚げ天ぷらは新しい油を使い、つぎにその油で魚や肉を揚げるようにします

○揚げる温度も高くなるといたみやすくなります

○使ったあとは少しさめ加減で油こしやガーゼ等でこしてカスを除きます

○油を足すときは、その油のこしを確めてから使用時に新しい油を加えるようにしましょう

三、野菜をいためる時

天ぷら等に使った後の劣化油を使うと急激に酸化重合が進みます。油本来の風味を生かすためにも新しい油を使いましょう。ラード、バター、マーガリン等固形脂は熱いうちに食べる料理に、冷めても良いものには、天ぷら油かサラダ油を使いましょう。

俳句会

〈文協俳句会〉

宮町　増井冬木

主柱に背凭たれをして虫を聴く
過去現在未来を虫に鳴かれをり

大北町　天野たま

火渡りの行者につづく秋暑し
老眼鏡のなじみて燈下親しめり

南町二　法月幸子

峠涼し海町山町振り分けに
盆道の湖へ展ごる奥浜名

南町一　影山智子

訳もなく怒りやすくて半夏生
イヤリングの水晶青む眞炎天

南町一　田辺つぎ子

青胡桃踏み出す宿場石畳

旭町　笠井みち子

きりもなや踊る阿呆に月隠る

清水町　宇佐美裕子

ぎしぎしや子の質問の矢継早

南町一　宇佐美幸子

諍いに負けし子虻にさされけり

南町一　上野みつ子

砂に彩生れて泉の湧きにけり

南町一　上野君江

わが庭の野菜七色盆の膳

東町二　望月喜子

堂奥も庫裡も人なし蟬時雨

南町一　望月洋子

健やかに在すちちはは虹の裾